

表-6.12.1.1(1) 陸域生態系の調査概要 (その5)

調査方法	ウ)ハナサキガエル類	<p>(財団法人世界野生生物基金日本委員会・科学委員会) [現地調査] (ア)生息状況 国土交通省の「平成9年版河川水辺の国勢調査マニュアル・河川版(生物調査編)」に準拠。 (イ)生息環境 気温、湿度、水温、流量、日射量に関しては、「建設省河川砂防技術基準(案)同解説・調査編(建設省河川局監修)」に準拠。 (ウ)植物調査 環境省「自然環境保全基礎調査」に準拠。 (エ)陸上動物調査 国土交通省の「平成9年版河川水辺の国勢調査マニュアル・河川版(生物調査編)」、環境省の「自然環境保全基礎調査」に準拠。 (オ)水生生物調査 国土交通省の「平成9年版河川水辺の国勢調査マニュアル・河川版(生物調査編)」に準拠。</p>
	エ)小型コウモリ類	<p>[既存の現地調査] (ア)事業実施区域周辺での洞窟探索 調査地域の地形や地質及び既存洞窟の水脈を参考に、事業実施区域を中心に踏査し、洞窟を探索した。 (イ)事業実施区域及びその周辺における生息ならびに利用状況 ・洞窟における生息ならびに利用状況 洞窟内で懸下している小型コウモリ類に赤色光スポットライトを照射し、目視あるいは双眼鏡使用により生息頭数の実数を数えた。数える際には傍らにバットディテクター(以下B. D. *1)を置き、松村(1988)、前田・赤(1999)を参考に、懸下のコウモリ類が発する超音波の周波数(ユビナガ: 50~60kHz、カグラ: 83kHz、コキク: 93kHz)に数値を合わせ入感数値を種の特定の参考とした。調査中は生息個体群に対する生息妨害を防ぐために、入洞時間を極力短くするよう配慮し10頭以上で群塊を形成している場合は概数による推定カウントを行った。繁殖期には、母獣が採餌のため出洞した後の夜間に入洞し、幼獣塊を写真撮影した。現像後、引き伸ばした写真から、撮影された幼獣の頭数を数えた。 ・飛翔通路 通過個体数調査方法は、前田・赤澤(1999)による方法に準じた。飛翔通過する小型コウモリ類の超音波がB. D.に入感した周波数により種を判別し、その小型コウモリ類が照明装置で照らした場所を通過する個体数を目視で数える方法で実施した。通過場所が1カ所に絞られる場所については赤外線ビデオテープレコーダとB. D.を併用し通過個体数を数えた。 ・環境別のB. D.入感回数: 小型コウモリ類の出洞及び採餌場所への移動飛翔が終了した後、人工草地、牧草地、耕作地、樹林地を踏査し3台のB. D.を用いて小型コウモリ類の各種につい</p>